

大社の祭りにみる雑神の祀り

田 中 宣 一

はじめに

祭りに供物は欠かせない。とくに食料・食品は、供えたものと同じ飲食物を神と共同飲食する直会が重要な意味を持つことから、欠かせない供物（神饌）である。神饌の種類や量は祭りの規模によって一様ではないが、祭りには、これらの調達と調製、献饌法、撤饌後の処置に一定の規則を設けたり、重々しい慣例を有している例が少なくない。それほどではなくても、神饌の内容に粗相があつてはいけなとか、供えかたに失礼があつてはならないというのは、祭りにかかわる人々の共通の心がまえである。

しかし祭りには、このような神饌の内容および神饌の供えかたと並行して、これらとは趣を異にし不思議といっても過言ではない供えかたを含んでいる例が珍しくない。小稿ではその不思議な例の検討をおして、祭りの構造についての私見を述べることを目的にしている。

一、雑神について

神は常設の神殿や神棚に常在するごとく現在一般に理解されているが、神は常在せず、祭りにあたって臨時に神座を設けてそこに迎え⁽¹⁾祀り、神送りをもって終了するというのが日本の祭りの古いかたちであった。平素は常設の神座に坐す神を拝しながらも、祭りにあたってはなお、古風な神迎え・神送りを厳修している例は決して少なくないのである。

潔斎をしたあとでこのように神を迎え、供物を献納し、神へ近侍したり神との共同飲食をとおして靈力を得たり、願意を謹告するとともに神意をうかがうさまざまな神態を執り行なうというのが、祭りの基本的な構成である。したがって祭りは、その靈力を得たり願意を告げるのもっとも相応しい神だけを対象にして行なえばよいはずである。しかし各種の祭りを仔細に検討してみると、靈力に期待しようとする神とはどうしても考えられない神にも献饌がなされ、祀る対象にしているのではないかと思われる例の意外に多いことに気づくのである。

靈力に期待し積極的に迎え祀ろうとする神を祭りの主神と呼ぶならば、靈力に期待はしないが祀らなければならぬと考えられているらしい神を、筆者は雑神と総称している。⁽²⁾この場合の雑とは、主たる関心の埒外のさまざまなものという意味で用いている。育成した畑作物に対する雑草、有用な建築材に対する雑木と同じ用いかたである。主神には、神典に登場するさまざまな神を比定したり、祖先神や水神、稻荷神、エビス神など特定の神格を念頭においているが、雑神は、存在は認めながらも関心の埒外にあるために特定の名を付す必要のない、うごむぞうの神ということである。祭りのなかに、埒外の雑神の存在を筆者がなぜ問題視するようになったのかと言えば、祭りによつては、献饌の態度が主神に対するのとは明らかに粗雑な不思議な供えかたのあること、したがつて神饌の内容も明らかに異なること、そしてこれらはほとんどが神との共飲共食を前提に供えられていないことに、気づいたからである。

これら雑神の祀りは、有名大社や地域神社、小社祠の祭りに限らず、年中行事化した家々の祭りにもしばしば見え隠れしている。また、個人の神社参詣に際してもみられることがある。筆者はこれらについていままでいくらか検討を加えてきたが、⁽⁴⁾雑神の祀りに共通しているのは、ほとんどが主神への献饌に先だつて行なわれているということであつた。

ではなぜ主神への献饌とは別に、靈力に期待しない関心の埒外の雑神まで祀らなければならぬのであろうか。それは雑神が、主神祭祀にいわば便乗して祭りを乞ひに訪れると考えられ

ていたからに違いない。雑神は悪神というわけではないが、忌避したり祀りを怠つたりすると主神の祭祀に障りを生じかねさせない迷惑な存在であると思われていた。ゆえに、とにかくまずこれらを祀ってしまい、⁽⁵⁾主神の祭祀を滞りなく行なおうとしたからであろう。そのために、主神への献饌に先だつて雑神への献饌、すなわち雑神の祀りが行なわれているのだと思われる。

祭りは、主神の靈力への期待や主神への願意の謹告を主目的としてなされるのであるから、祭り研究の力点が主神祭祀に置かれるのは当然としても、日本の祭りは、携わっている人々が現在意識しているかいないかは別として、各所に蟠り、機をみて祀りを乞おうとする雑神へも配慮しつづなされているのだということは、祭りの研究上、常に念頭におくべきであろう。

以下、有名大社の祭りにみられる雑神の祀り、雑神への配慮について検討していきたい。

二、賀茂祭の庭上神饌と散飯

古来、葵祭として知られている賀茂祭は、京都市の上賀茂神社（賀茂別雷神社）と下鴨神社（賀茂御祖神社）の例祭である。祭日は五月十五日である。

勅祭としてのその厳肅な神事と祭礼全般の華麗さは人びとのよく知るところであるが、供される特殊神饌においても、上賀茂・下鴨両社ともじつに豊かな内容を伝えている。ここではそ

のうち、上賀茂神社の庭上神饌と散飯について考えてみたい。⁽⁶⁾

賀茂祭のときに上賀茂神社で調製し供えられる主な神饌には、内陣神饌、外陣神饌、庭上神饌、それに奈良社の散飯、の四種がある。⁽⁷⁾

内陣神饌は、神地内の西御供所で調製され、そこから丸盤や小さな櫃に入れられ神職によって一つひとつ丁寧に本殿内陣まで伝供されたあと、丸盤から下ろして檜や柏の葉に載せて八足案上の御物棚（おものだな）に並べられる。⁽⁸⁾（かつては庁屋で調製し櫃に入れて御供所に運ばれ伝供されていたという。）

外陣神饌は、すべて土器（かわらけ）に盛られて二台の案と高坏の上に並べられ、同じく西御供所から案ごと高坏ごと本殿に伝供される。内陣神饌は本殿の扉の内側に供えられるが、外陣神饌は扉の外側に供えられる。

このように内陣神饌と外陣神饌は、献饌の場所や方法に差違があるとはいえ、西御供所から丁寧な伝供をへて本殿上に供えられていることに変わりはない。それにくらべて、庭上神饌はいかがであろうか。

(1) 庭上神饌

庭上神饌（ていじょうしんせん・にわづみしんせん）は庭積神饌とも表記され、本殿の床上に

ではなく、本殿前の庭上に据えられる。

庭上神饌は伝供されるのではなく、内陣神饌・外陣神饌の奉奠に先だつて、調製された西御供所から唐櫃に入れたまま白丁姿の人夫二人に担がれて(その前後に神職がつく)いったん楼門外に出され、そこからケイカバライを受けて楼門・中門をへて本殿前に運び込まれ(かつて庁屋で調製し、そこから楼門・中門をへて本殿前に供えられた方法を踏襲しようとしているのである)、唐櫃のまま、本殿前庭の立砂の間に低い案を置いてその上に据えられるのである。据えられたらすぐ櫃にかけていた薄い衣を取り、担ってきたオウゴ(棒)の紐をほどいて櫃からオウゴをはずし、そのままにしておく。そして唐櫃の蓋は、内陣神饌・外陣神饌の奉奠が終わったあと開けられるのであるが、神饌は結局、櫃からは出されなのまま供えられていることになる。

このように、本殿の床上ではなく、低い案があるとはいえほぼ地べたに置かれているのはなぜであろうか。また、神職による伝供がなされず人夫によつて直接本殿前庭に運び込まれ、櫃から出さないでそのまま供えられるのはなぜであろうか。内陣神饌・外陣神饌とは、献饌法において明らかに異なっている。どう考えても、尋常な供えかたとはいえないであろう。

櫃の中には、それぞれ折敷にヒバの葉を敷いた葉盆という器に、上盛りとして干鮭一杯、生貝一杯、塩一杯、鯛一杯、青海苔一杯、打鮑一杯、神馬草一杯、鱻一杯、和布一杯、梭魚一杯、鯉一杯、煎海鼠一杯という十二種十二杯が、また、下盛りとして鱒二十七杯、飛魚二十七杯、

煮しめ(煮小豆)二十七杯、落七杯、茗荷七杯、薊(根の輪切り)十三杯という六種一〇八杯、合計して十八種一二〇杯の食品が入られている。

これらの内容を見て気がつくことは、多種多量にもかかわらず、餅・飯・団子・酒がまったく含まれていないことである。先に内陣神饌・外陣神饌を述べた際にその内容は省略したが、内陣神饌・外陣神饌には多くの海の幸山の幸とともに、これら餅・酒類が揃っている。内陣神饌・外陣神饌には箸一具までが添えられているのである。したがって庭上神饌には、どこか本式でないという印象がどうしても拭えないのである。

以上、庭上神饌の異質さを述べたが、本式とは思えない神饌をなぜ伝供という方法もとらずに庭上に供えなければならぬのであろうか。主神が対象にされているのならば、明らかに失礼である。しかし、庭上においてであろうと供えられているのはまぎれもない事実であるから、そこには主神以外のなんらかの対象が、意識するとしないとにかかわらず想定されていると考えざるをえない。あるいは、かつて明確に想定されていたときがあったのかもしれない。その対象を筆者は、雑神と捉えているのである。伝統ある大社の祭りであるから、庭上神饌も外見上はそれなりに重々しいが、内陣神饌・外陣神饌に比べて異質であることに変わりはない。賀茂祭にはこのような雑神の祀りも内包されているのだと、筆者は理解している。

(2) 奈良社の散飯

奈良社（奈良神社ともいう）は奈良刀自神を祀る神社で、上賀茂神社の八撰社の一つに数えられている。奈良社は窺い知ることのできない深い歴史を秘めているようであるが、それはともかくとして、江戸時代には、神饌を調製すると、御供所に運ぶ前にその一部をまず奈良社に献じる慣わしがあったらしい。

江戸時代と同じ内容の神饌が献じられているのかどうかはわからないが、現在もその伝統は失われていない。すなわち、賀茂祭において他の神饌が供えられるに先だち、朝早くに、権禰宜がカイキ（搔盥）と呼ばれる檜製の四角い器に強飯二升を盛って奈良社に参り、閉じられている門の外からカイキの長い柄を持って差し入れるようにして供え、そのまますぐ撤下している。夕方にも、本殿の神饌が下げられたあと直会の始まる前に、早朝と同様なことが行なわれている。そしてこの神饌は、なんと散飯（さば）⁽⁹⁾と呼ばれているのである。散飯とは、仏教では曠野鬼神などへの施与物のことである。

奈良刀自神の本来の性格は未詳といってもよい。現在食物にかかわるミケツカミ（御饌津神）と考えられているが、そう考えなければならぬ理由はいまひとつ明らかでない。神の性格の曖昧さといい、閉まっている門の外から差し入れるようにして供えすぐに撤する方法といい、その神饌が散飯と呼ばれていることといい、奈良社の神饌は尋常とは言えないであろう。した

がつて、これも主神への神饌とは考えられず、雑神を想定した供物だと思わざるをえないのである。

三、春日祭の巳祓式と午御酒式の神饌

春日祭は奈良市春日大社の例祭で、祭日は三月十三日である。明治初期までの長い間、春二月上申の日と冬十一月上申の日に行なわれていたため申祭（さるまつり）とも呼ばれ、和舞や特殊神饌など多くの特徴を伝える古式豊かな祭りである。

勅使を迎えての例祭の日は右のとおりであるが、神社における祭祀はその三日前から始まっていると考えられる。すなわち、三月十日には、背後の春日山から神木（榊）を伐採して一の鳥居に立てる辰の立榊式が行なわれ、翌十一日には、巳の祓式が幣殿近くで厳修され、つづいて本殿前にて午の御酒式が行なわれる。十二日には、未の砂置式といい神の道もしくは境内を清める意味で御内鳥居内近くに清砂を置いている。そして十三日の勅使参向の例祭日を迎えるのであるが、十日から十三日にいたるまでが一連の祭祀と言つてよいであらう。⁽¹⁰⁾

さて、十三日を迎え、この日に本殿の四祭神に供えられる神饌、とくに御棚神饌と呼ばれている特殊神饌の豊麗さはよく知られているところであるが、筆者が小稿で注目するのは、それ

に先だつ十一日の巳の祓式と午の御酒式に用意される神饌の扱いかたである。以下、これらについて述べていきたい。⁽¹¹⁾

(1) 巳の祓式の神饌

幣殿の北、本殿前の庭には古くから林檎の樹が植えられており(ただし現在の樹は昭和三十年からのもの)、巳の祓式(みのはらえしき)はこの林檎の庭で行なわれる。

現在の式は、林檎の樹の下に案を置いて案上に供物を載せ、神職が幣殿にて祝詞をあげ、さらに春日祭に奉仕する祭員の清祓を行なうというものである。神饌の内容は、桑と酒、鯉節とかます(魚)である。白紙で巻かれた鯉節とかますが中央に井桁に組まれ、その四周に桑・酒が土高坏に入れて供えられるという形になっている。これらはあとで、神職がいただいているようである。

しかし、江戸時代末までの行ないかたは、やや異なっていた。神饌の内容は同じであったが、林檎の樹の下の敷石上に直接神饌を置いていたのである。江戸時代中期に作成された「春日大宮若宮御祭礼図」⁽¹²⁾には、左のように記されている。

巳の日祓 夕方、(中略)幣殿の東の間より神前に向、りんごの木の本に敷石有、其上に供物を備へ(中略)、祓有、禰宜紙燭を持ってらす、杜家禰宜祓にあふ

また、酒は器にて供えるのではなく、神饌（鯉節・かます）の上に榊の葉で注ぎ撒いていたという。そして、祝詞ではなく、中臣祓があげられていたという。

このように巳の祓式は、その名のとおり祓えの行事なのであるが、春日祭においては別に十三日に祓戸神社前において祓戸の儀が厳修されるわけで、なぜ物々しい祓えを二度行なわなければならぬのであろうか。十三日の祓戸の儀は勅使や参列者の修祓で、巳の祓式は祭りに奉仕する祭員一同を祓うのだと解すればよいのであろうが、祭員を祓うのだとするならば、なぜすべてが始まる初日の立榊式に先だつて祓式を行なわないのであろうか。筆者の素朴な疑問である。

さて、巳の祓式の神饌の特徴は、次のようにまとめることができよう。かつては地面の上にじかに置かれていたことが一つ。二つ目は、酒は器には入れられず、地上に置かれた神饌周辺に撒き注がれていたこと。一つ目も二つ目も、どうみても尋常な供えかたとは考えられない。三つ目は、これが祓えの式ならば当然と言えばそれまでだが、主神（四祭神）を祀る前（二日前）に供えられてしまっていること。四つ目は、式の性格上祓戸大神への供物と考えてよいのであるが、それならば確かな境内末社としての祓戸神社において行なわずに、わざわざ林檎の庭で供えるのはなぜであらうか。さらに「春日社年中行事」によると、江戸時代には、このときに用いた大麻と榊は風宮後殿に納めたとい⁽¹³⁾い、異様な雰囲気⁽¹³⁾がただよっているように思われる。

したがって巳の祓式の神饌は主神への神饌であるはずがなく、ここに筆者の言う雑神の祀りを想定することによってはじめて、巳の祓式の神饌の本来の意味が理解できるのである。

(2) 午の御酒式の神饌

巳の祓式が終わるとすぐ、宮司以下神職一同は中門御廊に着座して午の御酒式(うまのみきしき)に移る。この二つは現在はともに十一日に行なわれているが、江戸時代には巳の日と午の日というように、日を別にした祭事だった。

午の御酒式は、献饌・祝詞奏上・撤饌と型どおり進むが、そのあと一同は御廊から内院の庭に出て、撤下した神饌をいただくのである。神饌の内容は、一つの折敷にかます(魚)・柑子・栗・赤飯を並べ、もう一つの折敷に濁酒を入れた盃を置いたものである。

これら折敷を庭上に置き、宮司以下一同がいただくのであるが、その際注目すべきは、酒の第一献目を各自大地に注ぐのを慣例としていることである。⁽¹⁴⁾神社ではこれを、土地の神を祝い鎮めるために行なうのだと解釈している。⁽¹⁵⁾この解釈は解釈としても、神人の共同飲食の直会である神饌頂戴を、わざわざ直接に庭上において行なわれなければならない理由は何であろうか。また、なぜ第一献目を大地に注がねばならないのであろうか。さらには、この場合の土地の神とはどのような神であろうか。内院において厳粛に執り行なわれている祭事の一部であるだけ

に、一風変わったこの慣行の背景に、かつて雑神の意識されていたことを想定せざるをえないのである。

以上、春日祭の巳の祓式と午の御酒式の神饌について述べたが、御戸開の神事に始まる十三日（かつては上申の日）の主神祭祀に先だつその一日ないし二日前に、さまざまな雑神の存在が意識されその祀りが執行されていたのではないかと考えてみた。伝統ある春日祭であるだけに、いずれも重々しく装いをこらし独自に意味づけした祭事にはなっているが、献饌のしかたあるいは扱いかたを詳しくみると、これらはやはり主神への神饌とは異なる性格をもっている。この場合も、雑神の祀りを視野に入れることによって、不思議な方法のとられているわけが理解可能となるのである。

四、宗像大社地主神への神饌

福岡県宗像市の宗像大社は、天照大神の御子神ともえる三女神を祀る沖津宮・中津宮・辺津宮の総称である。海の神・航海守護の神として、古くから多くの人々の尊崇の対象とされてきた。

ここでは、中津宮・辺津宮において、春季例祭と秋季例祭および元旦祭の前に行なわれる地

主神への献饌について考えてみたい。⁽¹⁶⁾

春季例祭は、現在四月一日・二日の両日である。辺津宮では、それに先だつ三月三十一日夕刻五時に、神職一同が揃い、本殿の向かつて左前（拜殿の向かつて左横）に植えてある榊の前に簡素なしつらえをして神饌を供えている。神饌の内容は、神酒・餅・米・魚・野菜などごく一般的なものである。この祭りは宵宮祭と呼ばれ、神社では地主神を祀るのだと理解されている。中津宮でも、例祭に先だつ三月三十一日午後三時に、本殿の向かつて左前の梅の一樹のところで辺津宮と同じような祀りが行なわれる。

秋季例祭は十月一日から三日までの三日間である。十月一日はみあれ祭と呼ばれる海上神幸で有名だが、辺津宮では、例祭に先だつ九月三十日夕刻五時に、春季の例祭前日と同じように榊の前で簡単な地主神の祀りが行なわれる。中津宮でも九月三十日午後三時に、春季例祭前日と同じように地主神が祀られている。

元旦祭は一月一日の午前九時からであるが、辺津宮・中津宮ともに、それに先だつ午前七時に、春秋の例祭前日と同じように地主神が祀られている。

以上、春秋の例祭と元旦祭に先だつ地主神の祀りについて述べたが、そもそも地主神とはどのような神であろうか。地主神の一般的な解釈に従えば、宗像大社の創建以前から当地を占めていた神で、創建に際して宗像大社に土地の使用を認めた神ということになるのである。も

しそうならば、祭日と祭祀にしかるべき独立性がみられてよいと思われるが、そうなっているとは思えない。例祭や元旦祭に附随するように(すなわち主神である三女神の祭祀に附随するように)、平たく言えばその前座をつとめるかのように)、決まってその前に、主神祭祀に比べて簡単に祀られている様子なのである。境内には七十五末社一〇八神という多数の神々が祀られているが、それらの神とも違う。しかし、例祭や元旦祭を執り行なうにあたって必ずその前に祀ってしまったわけばならないと考えられていることは事実であり(すなわち祀らなければ例祭や元旦祭に不都合が生じかねないと恐れられているのであろう)、地主神だという神社の伝承はそれとして、筆者には主神祭祀に先だつ雑神の祀りの一つだと思えてならない。

関連して、辺津宮の高宮における祭祀にも触れておきたい。高宮とは、辺津宮の本殿背後の小高い森の中の聖地で、社殿はなく、四角に組まれた石組みだけがある。春秋の例祭初日と元旦の三回、本殿での祭祀のあと午前十一時ごろに、高宮の神籬を対象にして祭祀が執行されている。そしてそれとは別にその直前に、高宮境内地の磐座に対して神酒・米など簡単な神饌が供えられるのであるが、神社においてはこれも地主神の祀りだと解されているのである。

高宮は主神三女神降臨の地とされているので、高宮における神籬を対象とした祭祀は主神祭祀であるが、それに先だつ地主神の祀りは、筆者にはやはり雑神の祀りの一種に思えるのであるが、いかがであろうか。

上賀茂神社、春日大社、宗像大社という、日本の代表的な三大社の祭りに含まれている不思議と言つても過言ではない神饌について述べ、その背後には、雑神の祀り雑神への配慮が、現意識されているかいないかは別として存在するのではないかということ述べた。

雑神の祀りは、靈力を得たり祈願をこめようとする主神の祭祀とは、目的においてまったく異なっている。しかし、怠るわけにはいかないと思われているから行なわれているはずで、日本の祭りは、雑神の祀りをも内包した構造になつているのだということ強調しておきたい。祭り研究は、雑神の存在をも念頭に置いてなされるべきであろう。

なお、神社によつては、七十五膳など多くの神饌を供える例が珍しくないが、これらは、雑神の存在が想定されているかあるいはかつて想定されていたことを前提とすることによつて、神饌数の多い意味が解けてくるのではないであろうか。また、相殿とか摂末社として多くの神を祀っている神社も珍しくない。相殿や摂末社の神々は、かつて勧請したり他社の神を合祀した経緯の明らかかなものは別であるが、不明なものも相当数には、当該神社の長い歩みの過程において、雑神であつたものが何らかの契機によつて神名が付され、しかるべき神として認知されるにいたつたものがあるのではないであろうか。ご批評をいただきたい。

註

- (1) 小稿においては「祭り」と「祀り」を使い分ける。「祭り」は神事としての神まつり全体を意味するときに用い、「祭り」と同じ意味で「祭祀」を用いることもある。「祀り」は、直接に神をまつる行為そのものを指すときに用いる。
- (2) 『記紀』等の神典に登場するような特定の名称を持つ神道上の神に対し、民間信仰上において活躍するさまざまな霊格を「カミ」の語で統一する考えもあるが、実際の祭りにおいては明確には区別しがたいため、小稿ではすべて「神」の語で統一する。
- (3) 雑神の概念については、すでに拙稿「祀りを乞う神々―雑神への供饌・供養と祀りの成立―」（『國學院雜誌』九四―一一）において触れたことがある。
- (4) 前掲註（3）論文のほか、「厄神の祭祀と正月行事」（『成城文藝』一六一）、「枕飯と枕団子―葬送儀礼における雑神への施食―」（『日本常民文化紀要』二〇）、「烏勸請および御鳥喰神事―祭祀の成立と雑神の祀りにかかわらせて―」（『日本常民文化紀要』二三）、「散米と撒き銭」（『成城文藝』一八四）を参照いただきたい。
- (5) いわゆる祀り上げである。
- (6) 以下述べることは、昭和五十八年の儀礼文化学会の賀茂祭御神饌調査に参加させていただいて学んだことと、平成十四年三月に上賀茂神社の藤木保誠氏よりご教示いただいたことを参考にしての、筆者の見解である。儀礼文化学会と調査の際にお世話になった竹原貞三氏、および藤木氏には、心より御礼申し上げます。
- (7) これらの神饌の内容については、『定本日本料理 様式』（主婦の友社 昭和五十二年三月）および、『儀礼文化』七（儀礼文化学会編刊）に詳しい。小稿はこれらをも参考にしている。

- (8) その際、コマの御料と呼ばれる鯛と鮎の二膳が、御物棚の両脇下に置かれる。
- (9) 散飯と呼ばれる不思議な神饌は、他にも例がないわけではない。下鴨神社や伊勢神宮の例は、前掲註(3) 拙稿において触れた。
- (10) 『春日大宮若宮御祭礼図』(『神道大系へ神社編十三』 春日) 所収)によると、江戸時代には、申の日の四日前すなわち辰の日から始まり、戌の日までの七日間の祭りだったようである。
- (11) 以下述べることは、儀礼文化学会の昭和六十二年七月の儀礼文化講座において、春日大社の中根義明氏が講じられた「春日祭」の内容とそのときの配布資料、および平成十年七月に春日大社の岡本彰夫氏よりご教示いただいたことを参考にしての、筆者の見解である。中根氏および岡本氏には、心より御礼申しあげます。
- (12) 前掲註(10) 同書(『神道大系』 三一―ページ)
- (13) 前掲註(10) 同書(『神道大系』 二四九ページ)
- (14) 直会の際、初献を大地や空中に注いだり撒いたりする例は珍しくない。一例を挙げると、能登の国一の宮である気多神社の鵜祭では、初献は、受けた杯を目通りに捧げ持つて社務所東側の雨落ちの場所近くに行き、八神に捧げようとの心持ちで地に注いでいる。このとき、土坏も一緒に捨てるのだという(前掲註(3) 拙稿参照)。
- (15) 『春日大社のご由緒』 春日大社発行 平成七年十一月 七ページ
- (16) 以下述べることは、平成十五年三月に、宗像大社の杉山安彦氏よりご教示いただいたことを参考にしての、筆者の見解である。杉山氏には、心より御礼申しあげます。